

遼東の遼寧式銅剣から弥生の年代を考える

宮本, 一夫
九州大学大学院人文科学研究院歴史学部門 : 教授 : 東アジア考古学

<https://doi.org/10.15017/10319>

出版情報 : 史淵. 145, pp.155-190, 2008-03-01. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン :
権利関係 :

遼東の遼寧式銅劍から弥生の年代を考える

宮 本 一 夫

一 はじめに

遼寧式銅劍の研究は、秋山進午の銅柄を中心とした編年研究（秋山一九六八・一九六九）を皮切りとして、遼西起源論と遼東起源論が大きく対立したまま今日に至っている。また、遼寧式銅劍の研究は、中国や日本のみならず韓国においても盛んに行われてきている。これは朝鮮半島においても遼寧式銅劍が多数発見されているからである。さらに、とりわけ弥生の年代論を再考する議論の中で、年代論を含めて盛んな研究が今日発表されている。私自身も弥生の年代論を議論するにあたって、幾つかの論攷を発表してきた（宮本二〇〇三b・二〇〇四b・二〇〇四c）。この間の弥生年代論に関する学史は、既に大貫静夫が簡明にまとめている（大貫二〇〇五）ので、それに譲ることとし、遼寧式銅劍の変遷とその実年代の議論をここでは行いたい。

私は、これまで遼寧式銅劍や細形銅劍の年代を考える際に、遼西、遼東、朝鮮半島北部、朝鮮半島南部に大きく分けて、それら銅劍の型式変遷と年代の定点を示してきた。それに対していくらか異論（岩永二〇〇五）が示されているが、その異論が提出された根拠にはいくらか誤解が含まれているように思える。こうした異論に反論

し自身の論点の正しさを示す前に、まず、これまでの私の議論を振り返ってみると、遼東の遼寧式銅劍の変遷とその年代の定点を示すことがいささか不十分であったように思える。すなわち、私自身のこれまでの論攷では、朝鮮半島の銅劍文化と中国東北部の遼寧式銅劍文化の關係ならびに編年的な平行關係を議論するにあたって、遼東を中心とする遼寧式銅劍の型式細分や編年問題をあまり詳しく議論してこなかった反省がある。そこで私自身の遼東編年を示すことにしたが、近年においても遼東・遼西に関する遼寧式銅劍の編年では、町田章（二〇〇六）や宮里修（二〇〇七）がそれぞれ見解を示している。併せて私自身の見解との差違点や類似点を指摘しておきたい。

本稿ではまず、遼東の年代の定点を示す意味で重要な資料である山東省棲霞県杏家荘二号墓の銅劍資料を検討することから始めたい。さらに、この検討を踏まえ、遼東の遼寧式銅劍の変遷を押さえ、混乱している朝鮮半島北部の遼寧式銅劍との併行關係を整理しておきたい。さらに、その上で異論への反論を示しながら、最終的に弥生の年代論に関する私見を述べておきたい。

二 杏家荘二号墓出土青銅短劍

杏家荘二号墓は山東省棲霞県占瞳郷の台地上に位置するいわゆる東周墓である（煙台市文物管理委員会・棲霞県文物事業管理処一九九二）。二号墓は他の二墓の墓とともに近接して存在しており、さらに二〇m離れた地点に別の墓が発見されるなど複数の墓からなる墓地群をなし、この地域の有力集団の族墓である可能性がある。墓は豎穴一槨一棺からなる一般的な東周墓である。副葬品は、戈、矛、鏃などの青銅武器と鏃、銜、車軛などの青銅車馬具から構成されている。この他、鼎、豆といった青銅彝器を模した仿製陶器が副葬されている。このよ

うな副葬品あるいは墓の規模や構造から見れば、杏家荘二号墓は当時の士大夫クラスの墓であり、萊国あるいは斉国の地方豪族の墓と考えるべきであろう。

『史記』田敬仲完世家によれば、紀元前四八〇年には膠東半島は田常の封邑地となり、斉の領域に入る。その位置は、斉国の中心である臨淄から見れば東側の辺境地帯であり、斉国の領域の東疆に位置しているといつてよい。そこで近年注目されているのが山東省海陽市嘴子前墓群である。先の田氏に関する文献記述と嘴子前四号墓出土甗や盂の陳氏銘を関係づけ、陳氏すなわち田氏の名をもつ銅器の被葬者は田氏と関係する人物で、嘴子前墓群を田氏の族墓と考える見解がある（馬良民・林仙庭二〇〇二、林仙庭・王志文二〇〇二）。さらに、この四号墓と六号墓の青銅彝器や副葬陶器の型式から、これらの墓葬は嘴子前墓群中期と位置付けられ、春秋後期の前半段階と考えられている（王富強二〇〇二）。

一方、杏家荘二号墓の副葬品は青銅彝器が出土していないものの、副葬陶器とりわけ豆の型式から見れば、嘴子前墓群中期の嘴子前四号墓と同型式である（宮本二〇〇六）。また、杏家荘三号墓では青銅彝器の匜と舟が出土しているが、その形態は嘴子前墓群中期と同じである。さらに杏家荘二号墓出土の蟠螭文が施された書も春秋後期に納まるものである。嘴子前墓群中期の実年代は、一般的にいつて春秋後期前半の前六世紀後半を考えるのが妥当である。このため、嘴子前四号墓の被葬者を同時期の田乞とみなす考え方も見られる（林仙庭・王志文二〇〇二）。被葬者問題は別として、併行関係でいえば杏家荘二号墓も同時期とすることができ、遅くとも紀元前五〇〇年頃の墓葬であることは間違いない。

こうした墓に、斉など六国の周社会に一般的に見られる武器とは異なった異質な副葬品が納められていた。遼寧式銅剣である（王青二〇〇七）。報告で示された青銅短剣は鋒が少しかけており、また刃部がやや湾曲し、かつ茎のみからなる把手をもたないものである。こうした形態の剣は周社会に存在しないものである。この墓が位置

する山東半島の東端は、先史時代から続く遼東半島との交流の深い地域である。可能性として、遼東半島を経由していわゆる遼東の遼寧式銅劍がもたらされたと考えるべきであろう。

さて、この度、この杏家荘二号墓出土の青銅短劍を直接観察し実測することができた(図1-1)。まずその所見を示すことから始めたい。現存長二六・〇cm、最大幅三・六cm、厚さ一・〇cmを測る。鋒の先端が折れているものであり、周代の副葬品としてこのような欠損品を副葬品として選ぶことこそ珍しい例である。刃部の突起がほとんどないものであり、これに対応する脊の隆起も存在しない典型的な遼寧式銅劍2式に入るものである。ただし、突起に対応する脊の部分で研ぎ分けが行われ、これにより刃部に微かに突起の痕跡が残るものである。ただし、研ぎ分け部分は遼寧式銅劍1式で見られたような研ぎ分けが上下・左右対称になるようなものではなく、

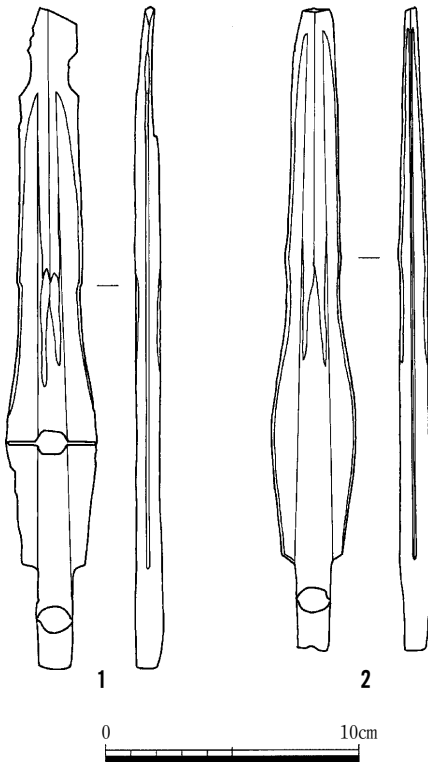


図1 遼東の遼寧式銅劍2 a式
(1 杏家荘2号墓、2 伝撫順出土)

鋒側の研ぎに重なるように突起部下端の研ぎを行うものがあり、さらにその研ぎも左右がきつちりと対称にはなっていないものである。既に研ぎ分けの規範が解体し始めたものである。また、関は角をなして収束しており、林澧が述べた(林澧一九九七)ように遼寧式銅劍内の新しい特徴を示している。また、欠損した

鋒も遼寧式銅劍1式に比べ発達して延びている。

このような遼寧式銅劍2式に最も類似した形態を示すのが、京都大学蔵の伝遼寧省撫順出土の銅劍(図1-2)である。この銅劍も鋒が僅かに欠けているが、杏家莊二号墓のものに比べ鋒は発達していない。しかし全体的な大きさは、現存長二五・三cm、最大幅三・三cm、厚さ一・一cmと杏家莊二号墓のものとはほぼ同じものであると想定される。その特徴は突起部がほとんどなく、突起部に対応する脊の隆起も微かにみられる。脊の研ぎ分けは確認できないが、突起部相当位置から下端の脊の研ぎは杏家莊二号墓のものと同様である。この伝撫順出土銅劍には銅柄Ⅱ式が伴っている。以上のように伝撫順出土銅劍は杏家莊二号墓と同一型式であり、このような遼寧式銅劍2式と銅柄Ⅱ式が紀元前五〇〇年には製作されていたということが明らかになったのである。

三 遼東の遼寧式銅劍と吉長地区の遼寧式銅劍

上記した杏家莊二号墓ならびに伝撫順出土銅劍を、遼東の遼寧式銅劍内でより明確に位置づけるには、形式的な細分が必要である。これまで、突起の有無で遼西、遼東の遼寧式銅劍を大きく遼寧式銅劍1・2式に区分したが、これ以上の細分を避けたのは、秋山進午氏が述べている(秋山一九六八・一九六九)ように、劍身と劍柄・劍把頭が別鑄されている遼寧式銅劍においては、劍身の變化では銅劍の属する文化内容總体を規定することが難しく、むしろ劍柄の變化の方が銅劍の變化を示し易いという観点に基づいている。また、先の論文(宮本一九九八)では劍身の規格性から遼西や遼東という地域差あるいは製作地の違いというものを明確にすることに力点があった。現在、朝鮮半島の銅劍の變遷を意識する場合に、やはり遼東の銅劍の型式細分とその變遷ならびに位置付けは重要である。ここではあえて遼東の型式細分を試みたい。型式細分にあたっては、刃部の突起、脊の隆起、

脊の研ぎ形態の三つの属性を中心に検討していく。この場合、遼西も型式分類を再考する必要がある。まず、遼西の型式細分から述べていくことにする。

(一) 遼西の型式細分

かつて遼河下流域の瀋陽地区の銅劍も系統的には遼西に含めて検討した(宮本一九九八)。これはこの地域の墓葬構造が木槨や木棺を主体とするもので、その遼東の石槨墓を主体とする地域と社会性が異なっていると判断したためである。さらには銅劍そのものの規格性が遼西のものと同じである点をも考慮したためである。この対象となったものが瀋陽市鄭家窪子の銅劍である。鄭家窪子六五一二号墓の一号銅劍は比較的突起が明確であるが、そのほかの二号銅劍や三三号銅劍は突起がかなり不明確であるもの、かろうじて突起に相当する脊部分の隆起が認められる。こうした特徴に近似したものは、遼西では阜新胡頭溝五号墓のもの(図2-2)などが上げられる。突起が退化しており、突起に相当する脊の隆起もかろうじて認められる。さらに関の下端は角が認められ鋭角的に収束している。こうした特徴は、典型的な遼寧式銅劍1式である朝陽市十二台営子の銅劍(図2-1)とは明確な差異が認められる。十二台営子の銅劍は、発達した脊の隆起部分を対象点として研ぎ分けが明瞭である。また関は丸みを帯びて収束している。こうした特徴を持つものを遼寧式銅劍1a式とすれば、突起が不明確で、突起に対応する脊の隆起がかろうじて認められ、かつ関が鋭角的な角をもつ胡頭溝五号墓や鄭家窪子六五一二号墓二・三三号銅劍を1b式と位置づけることができる。1a式は内蒙古寧城県小黑石溝八五〇一号墓や寧城県南山根などの伴出する青銅彝器から遅くとも前八〇〇年頃には成立しているものであり、上限を前九世紀にまで遡るものである。また、1b式は喀左南洞溝の青銅彝器が春秋後期のものであり、その下限を前六世紀とすることができであろう。ただし1a式から1b式の変化時期を明確にすることは今のところ不可能である。

なお、1 a 式の年代の定点は小黒石溝八五〇一号墓にある。小黒石溝の青銅彝器のうち地方器である可能性があるものや伝世のものを除くと、許国に関する銘文をもった簋が年代の定点として挙げられる。この簋は、脚台をもち瓦文が施されるところに特徴がある。同じ特徴を示す簋は、晋穆公が被葬者と考えられる山西省天馬曲村六四号墓にも認められる(山西省考古研究所ほか一九九四)。晋穆公の没年は前七八五年であり、この簋はそれ以前に製作されたものである。小黒石溝の簋は曲村六四号墓の簋より器が深めであり把手にも文様が施されるよう

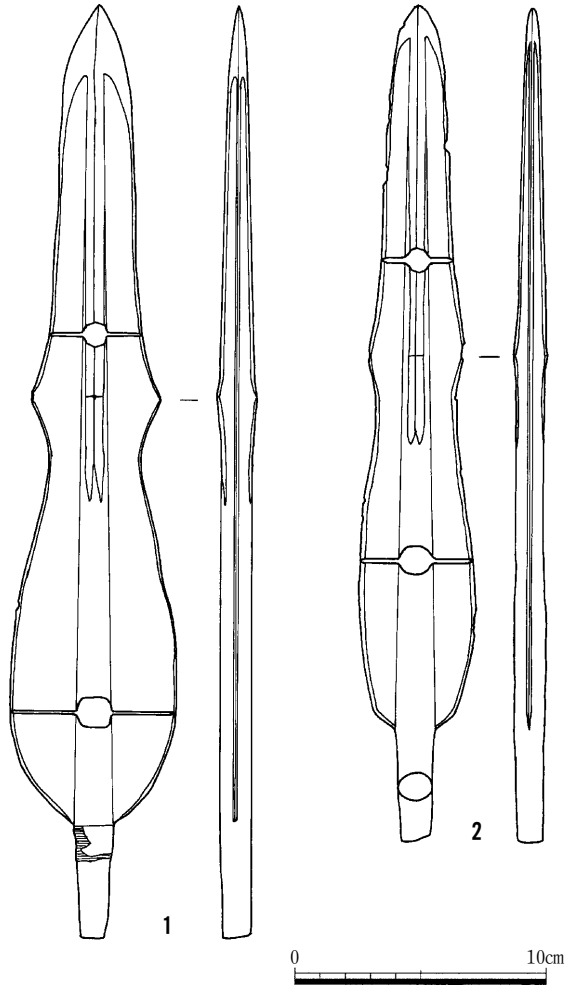


図2 遼西の遼寧式銅劍1式
(1 十二台營子、2 胡頭溝5号墓)

に、型式学的には小黒石溝の方が古いものである。したがって、前七八五年より古い前九世紀が妥当ということになるであろう。ただし小黒石溝の簋は、林巳奈夫氏などの型式編年によれば西周ⅢA期であり(林一九八四)、西周後期前半ということになる。この際、林氏は西周を前一〇二七年頃から前七七一年の二五七年間年とし、これをおおよそ三分割して西周後期の始まりを前八五〇年頃と考えていたわけである。ところで、西周後期は青銅彝器の様式的分期と銘文の王名とを対比するならば、厲王以降ということになる。近年の夏商周三代断代工程の研究結果によれば、厲王元年が前八七七年とされ(夏商周断代工程专家组二〇〇〇)、西周後期前半は前九世紀で問題はない。ただし、平勢隆郎氏の古代紀年の研究(平勢一九九六)によれば、金文内容と林巳奈夫氏の青銅彝器の型式編年との対応を検討した場合、林巳奈夫氏の西周ⅢA期とされたものが、穆王や共王といった西周中期の前一〇世紀に遡るものにも認められるとする。これが正しいとすれば、この簋の製作年代も前一〇世紀の後半まで遡る可能性がある。このあたりが実年代比定の難しいところであり、小黒石溝の遼寧式銅劍も前一〇世紀まで遡る可能性が残されているのである。ただし一般的な分鑄式の遼寧式銅劍は内蒙古寧城県南山根一〇一号墓から出土しており、伴出する青銅彝器が西周後期から春秋初期であるところから判断すれば、今のところ典型的な遼寧式銅劍は前八〇〇年頃には出現していたとみなしておいたほうが妥当であろう。

さて、遼寧式銅劍2式の細分に関しては、以下の遼東の型式細部の際に併せて検討したい。

(二) 遼東の型式細分

このような遼西の型式細分を遼東において適応した場合も同様であろうか。以下に遼東の遼寧式銅劍の型式細分を述べるが、遼東における銅劍型式とその具体例に関しては表1に掲載した。遼西や吉長地区に関する事例は、拙稿において既に示している(宮本一九九八・宮本二〇〇〇)が、遼東に関しては以下に示す遼寧式銅劍1式の

みに限っていた(宮本一九九八)ため、ここでは再度、集成を示すことにする。

1a式と考えられるものは、大連市金州区趙王村の銅劍(図3-1)などに認められるように突起が明瞭であり、突起部に対応する脊の隆起も明瞭であるとともに、ここを基点に研ぎ分けが行われている。さらに関は丸みを帯びている。一方、1b式は遼東からやや内陸の吉長地区との中間に位置する地域の資料ではあるが、吉林省四平市鉄東区下三台水庫出土銅劍(宮本二〇〇二a)などが挙げられる。下三台水庫出土のもの(図3-2)は突起が不明瞭で退化しており、さらに突起に対応する隆起もかなり退化している。さらに関が角をなしており、こうした特徴は1b式に相当している。

型式学的に1b式を経て、杏家莊二号墓や伝撫順の遼寧式銅劍2式が成立する。この場合、2式も型式細分が

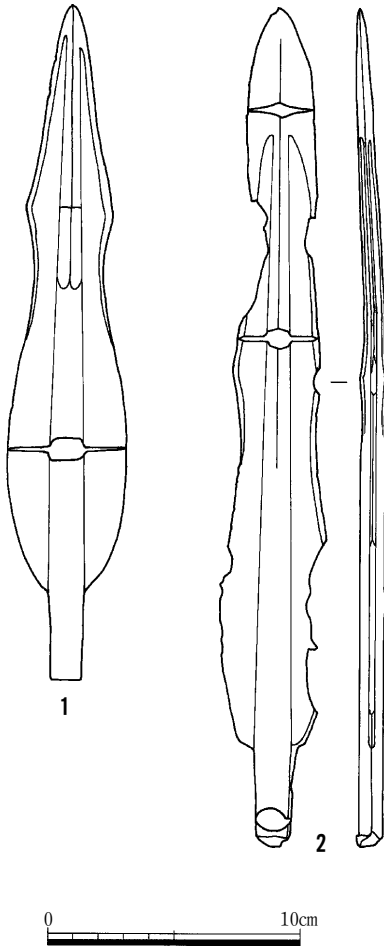


図3 遼東の遼寧式銅劍1式
(1 趙王屯、2 下三台水庫出土)

表1 遼東における遼寧式銅劍の集成

数値単位はcm。
() は一部欠損を示す。

地 名	全 長	最大幅	劍身長	型 式	文 献
遼寧省清原県土口子郷門臉	21.8	5.2	19.1	1 a 式	考古1981-2
遼寧省清原県北三家郷大葫蘆溝	21.9	5.2	18.6	1 a 式	考古1982-2
遼寧省大連市甘井井市区營城子楼上M 3	25.2	5.0	23.1	1 a 式	考古1960-8
遼寧省大連市甘井井市区營城子楼上M 3	25.5	5.5	21.0	1 a 式	考古1960-8
遼寧省撫順市大甲郷後山	26.0	5.6	22.5	1 a 式	文物1983-9
遼寧省大連市甘井井市区營城子鎮後牧屯子	26.2	5.4	22.2	1 a 式	遼海文物學刊1993-1
遼寧省大連市金州区亮甲店鎮趙王村	26.6	4.7	23	1 a 式	遼海文物學刊1993-1
遼寧省新金県双房M 6	26.7	4.5	23.1	1 a 式	考古1983-4
遼寧省大連市旅順口区三潤堡鎮蔣家村	26.8	5.7	22.8	1 a 式	遼海文物學刊1993-1
遼寧省大連市甘井井市区營城子双砬子	27.0	5.8	23.6	1 a 式	崗上・楼上
遼寧省大連市甘井井市区營城子崗上M19	27.2	5.3	23.7	1 a 式	崗上・楼上 (双砬子与崗上)
遼寧省大連市金州区亮甲店鎮趙王村	27.5	6.2	24.0	1 a 式	遼海文物學刊1993-1
遼寧省大連市甘井井市区營城子鎮後牧城駅	27.8	5.0	23.4	1 a 式	遼海文物學刊1993-1
遼寧省大連市甘井井市区營城子楼上M 3	28.4	5.7	25.1	1 a 式	考古1960-8
遼寧省大連市甘井井市区營城子崗上M 6	28.7	5.4	25.2	1 a 式	崗上・楼上 (双砬子与崗上)
遼寧省大連市旅順口区江西鎮小潘家村	28.7	(5.0)	24.7	1 a 式	遼海文物學刊1993-1
遼寧省遼陽市二道河子M 1	28.8	6.2	25.2	1 a 式	考古1977-5
遼寧省大連市甘井井市区營城子崗上M18	29.4	5.2	25.3	1 a 式	崗上・楼上 (双砬子与崗上)
遼寧省大連市旅順口区南山裡劉家峪	31.6	5.7	27.5	1 a 式	牧羊城
遼寧省岫岩県西房身	(30.0)	3.2	(27.0)	1 a 式?	考古1984-8
遼寧省撫順市針織一廠	24.5	3.2	20.9	1 b 式	考古1981-5
遼寧省金県董家溝郷队龍泉	27.0	3.67	24.0	1 b 式	崗上・楼上 (双砬子与崗上)
遼寧省大連市甘井井市区營城子楼上M 3	30.0	5.8	25.7	1 b 式	考古1960-8
吉林省四平市鉄東区下三台水庫	33.1	(4.4)	29.3	1 b 式	東北アジアにおける先史文化の比較考古学的研究
遼寧省西豊県誠信村	(20.0)	2.9	(16.8)	1 b 式	考古1995-2
遼寧省大連市旅順口区江西鎮羊頭窪	(20.8)	5.0	(17.3)	1 b 式	遼海文物學刊1993-1
遼寧省本溪市明山区高台子郷梁家村M 1	(28.1)	5.3	(24.1)	1 b 式	考古1987-2
遼寧省莊河市城山郷当鋪村劉屯	25.5	3.7	22.0	1 b 式?	遼海文物學刊1993-1
山東省棲霞県占岫郷沓家莊2号墓	(26.0)	3.6	(22.0)	2 a 式	考古1992-1
伝遼寧省撫順出土 (京都大学蔵)	(25.3)	3.3	(21.8)	2 a 式	京都大学文学部博物館考古学資料目録3
遼寧省大連市旅順口区南山裡劉家峪	(25.0)	4.0	(22.1)	2 a 式	牧羊城
遼寧省金県董家溝郷队龍泉	25.2	3.0	22.2	2 a 式	崗上・楼上 (双砬子与崗上)
遼寧省庄河市城山郷当鋪村	25.5	3.7	22.0	2 a 式	遼海文物學刊1993-1
遼寧省大連市旅順口区南山裡劉家峪	28.8	3.6	25.0	2 a 式	牧羊城
遼寧省大連市金州区大李家溝大嶺底村	25.2	(2.7)	23.5	2 a 式?	遼海文物學刊1993-1
遼寧省金県董家溝郷队龍泉	23.5	3.5	20.3	2 b 式	崗上・楼上 (双砬子与崗上)
遼寧省本溪市明山区高台子郷梁家村M 2	28.6	3.5	25.3	2 b 式	考古1987-2
遼寧省大連市旅順口区鉄山鎮尹家村河北岸	32.5	3.8	28.5	2 b 式	遼海文物學刊1993-1
遼寧省本溪県上堡1号墓 (M 1 : 3)	32.7	3.0	28.8	2 b 式	文物1998-6
遼寧省寬甸県趙家堡子	33.0	3.8	31.0	2 b 式	考古1984-8
遼寧省本溪県劉家哨	37.3	3.5	33.5	2 b 式	考古1992-4
遼寧省遼陽市亮甲山3号墓	(25.8)	3.6	欠損	2 b 式	考古1964-6
遼寧省長海県大長山郷哈仙島徐家溝	(33.0)	3.5	(30.0)	2 b 式	遼海文物學刊1993-1
遼寧省本溪県劉家哨	(34.7)	4.0	(30.8)	2 b 式	考古1992-4
遼寧省遼陽市亮甲山1号墓	欠損	3.5	欠損	2 b 式	考古1964-6
遼寧省撫順市將軍堡	24.0	3.6	20.4	2 b 式?	文物1983-9
遼寧省普蘭店市花爾山郷快馬廠	33.0	(3.2)	30.9	2 b 式?	遼海文物學刊1993-1
遼寧省海城県大屯	35.0	3.1	28.5	2 b 式?	考古1964-6
遼寧省本溪県劉家哨	(35.8)	3.6	(31.6)	2 b 式?	考古1992-4
遼寧省寬甸県泡子峪	欠損	3.9	欠損	2 b 式?	考古1984-8
遼寧省東溝県大房身	32.0	3.3	29.0	3 a 式	考古1984-8
吉林省集安県太平公社五道嶺溝門	34.0	3.0	30.4	3 a 式	考古1981-5
遼寧省本溪県上堡1号墓 (M 1 : 4)	36.5	3.0	33.0	3 a 式	文物1998-6
遼寧省新賓県大四平公社馬架子	37.8	3.9	34.2	3 b 式	文物1983-9
遼寧省本溪県林堡1号石椁墓	45.4	2.7	28.4	3 b 式 (銜式)	考古2005-10
遼寧省昌図県長堯郷翟家村	(32.5)	3.8	30.8	3 b 式?	遼海文物學刊1993-1
遼寧省大連市旅順口区尹家村12号墓	33.6	3.6	29.8	4 式	崗上・楼上 (双砬子与崗上)
遼寧省桓仁県大甸子	欠損	2.7	欠損	4 式	遼寧文物1981-1
遼寧省鳳城県小陳家	36.7	3.2	33.5	4 式?	考古1984-8

遼東の遼寧式銅劍から弥生の年代を考える

可能である。杏家莊二号墓や伝撫順のものは突起部はほとんど形骸化し残っていないが、研ぎ分けなどからかうじてその位置が推定できるものである。また突起に対応する脊の隆起が見られないか微かに残るものである。一方、完全に突起が存在せず、研ぎもそれまでの研ぎ分けに応じた規範から、その規範が消失し、茎近くまで研ぐものが認められる。この場合、前者と後者は型式学的に区分すべきであり、前者すなわち杏家莊二号墓や伝撫順のものを2 a 式とする(図1)。2 a 式は脊の隆起は存在しないか、伝撫順のもののように微かに存在するもので、研ぎ分けなどにより突起の規範を残すものである。一方、研ぎ分けは存在せず、突起も完全に消失し、脊の研ぎによる稜線が剣身下端まで延びる寛甸県趙家堡や本溪県劉家哨などは2 b 式(図4-1)とすることができらるであろう。この2 b 式は、型式学的には脊の研ぎによる稜線が次第に剣身下端から茎近くまで延びる傾向にある、さらに鋒が発達する変化方向にあると想定できる。また、形態的には突起を消失したために、剣身下端が膨らみ、剣身下端の刃部は湾曲をなす特徴が見られるが、関は2 a 式と同様に鋭角的に終わっている。

なお、遼西において突起部が形骸化して微かに残る遼寧省凌源県三官甸のもの(遼寧省博物館一九八五)も、この2 a 式に相当する。三官甸からは前五世紀と考えられる青銅鼎が共伴しているが、杏家莊二号墓の2 a 式銅劍の年代を前五〇〇年を下限と見ることとも、大きく矛盾は認められない。遼寧省建昌県東大杖子一四号墓出土遼寧式銅劍も2 a 式であり(小林ほか二〇〇七)、共伴する燕式青銅彝器は春秋後期のもの(国家文物局二〇〇二)であり、矛盾はない。

また、2 a 式の伝撫順出土銅劍には銅柄Ⅱ式が共伴するが、遼寧省金県臥龍泉でも2 a 式銅劍と銅柄Ⅱ式が共伴している(東北アジア考古学研究会誌一九八六、中国社会科学院考古研究所一九九六)。銅柄Ⅱ式の出現が2 a 式銅劍以後であることと、銅柄Ⅰ式が1 a 式銅劍や1 b 式銅劍に共伴し、遼西に主に分布することと年代的にも相関している。

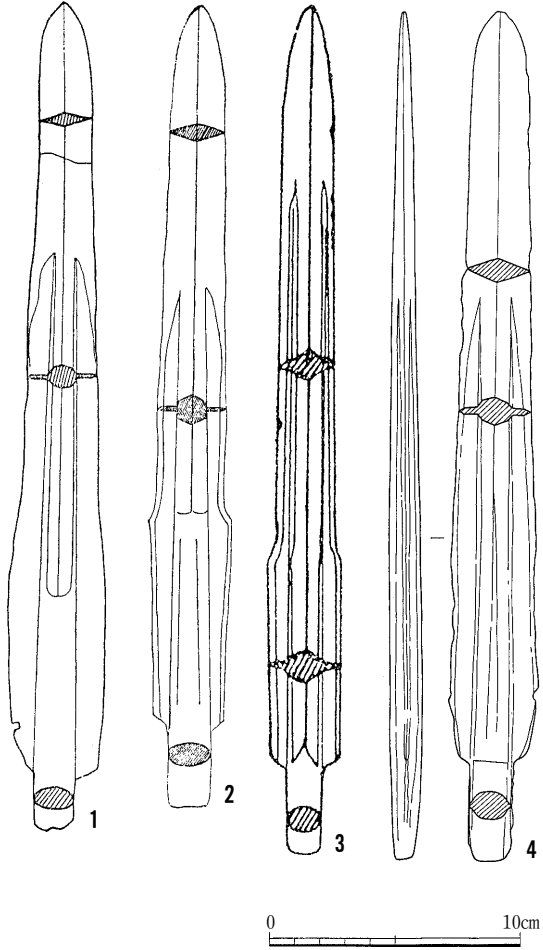


図4 遼東の遼寧式銅劍 2b式・3式・4式
 1(2b式、趙家堡)・2(3a式、大房身)・
 3(3b式、五道嶺溝門)・4(4式、尹家村)

2b式は遼陽などの遼東の中心部に分布するのみでなく、吉林省大徳県大青山や吉林省樺甸県西荒山屯などの遼東の周辺部である吉長地区にも広がっている。2b式の年代は鉄器が出現する前段階の前四世紀段階までは存続していたと考えられる。遼寧省長海県大長山郷哈仙島徐家溝では、2b式とともに中国式銅劍が共存している(許明綱一九九三)が、長山群島の哈仙島という立地からは、山東半島すなわち齊国との関係からもたらされたものであり、2a式の杏家荘二号墓とは逆方向の関係性と想定できる。したがって遼東に燕の影響が生まれる以前

の前5世紀から前4世紀に2b式は存在することに何ら問題はない。また、遼西は前六〜五世紀には燕の間接支配を受けるいわゆる燕化した地域（宮本二〇〇〇・二〇〇七）であるが、例えば、遼寧省建昌縣孤山子一号墓（遼寧省文物考古研究所ほか二〇〇六）では、遼寧式銅劍2b式と共に中国式銅劍、さらに燕式陶器が出土している。その年代は前五世紀中葉から後半と考えられ（小林ほか二〇〇七）、2b式の比較的古い段階のものにあたるであろう。

なお、吉長地区における吉林省樺甸県西荒山六号墓からも2b式銅劍が出土している。これには鉄斧や鉄刀子などの鉄器が伴っている（吉林省文物工作队・吉林市博物館一九八二）。この吉長地区に広がった2b式は関に製造後に円孔があげられており、遼東に認められた銅劍としての用途あるいは装着法に地域的な変化が認められる段階である。2b式が遼東周辺部ではやや後続する時期まで存続していた可能性があるだろう。2b式銅劍と鉄器が共存していたところから、遼東の周縁地域では2b式銅劍が前3世紀まで存続しているということ、本論の考え方は齟齬が存在していない。しかし一方では吉長地区に鉄器が出現するのが、必ずしも遼東郡設置以後であるかどうかは保証の限りではない。燕では既に前五世紀には鉄器が存在しているのであり（河北省文物研究所一九九六）、燕化した遼西でも早い段階に鉄製工具が流入している可能性がある。遡って前四世紀代に吉長地区に鉄器が出現していた可能性もあり、ここでは2b式の存続期間を前五世紀から前四世紀としておきたい。

この他、関の稜線が延び刃部下端が丸みを帯びて終わるのではなく、剣身下端に段部を形成した定型化した銅劍が遼東から吉長地区に認められる。これを3式とすることができる。3式はさらに脊の研ぎが段部の一で終わる3a式（図4-2）と、脊の研ぎが剣身下端まで延びる3b式（図4-3）に分けることができる。この3a式は、剣身下端の形態が膨らみ気味ものから、その境を強調するように段部を形成する意味では、2b式からの直接的な型式変化と考えられる。例えば遼寧省本溪県上堡（魏海波・梁志龍一九九八）や吉林省輯安県五道溝漢

門などに3 a 式が存在する(集安県文物保管所一九八一)。3 b 式は劍身下端の段部の境がより退化するように柄部近くまで脊が研がれることになる。さらに吉長地区ではこうした3 a・3 b 式銅劍が触角式銅劍として採用されている(宮本二〇〇二b)。遼東では遼寧省本溪県朴堡一号石棺墓に触角式銅劍である3 b 式銅劍が出土している(梁志龍・魏海波二〇〇五)。

3 a 式銅劍は、上堡の墓葬では鉄器が共伴していることから、戦国時代後半期の前4〜前3世紀のものと位置付けられる。朴堡一号石棺墓の3 b 式銅劍は、触角式銅劍としてはII b 式に位置付けられる(宮本二〇〇二b)が、この墓には羽状獸文地鏡が共伴している。この鏡は私の戦国式鏡の編年(宮本一九九〇)でいうと、その縁形から見て第IV・V段階に相当するものであり、前三世紀の第二・第三四半期に相当している。すなわち前三世紀中葉に属するものであり、この3 b 式銅劍の年代の一点もこのあたりにあろう。また、遼寧省昌図県翟家村では墓葬から3 b 式とともに中国式銅劍や銅鍍が出土する(李一九九三)が、これは前三〇〇年頃の遼東郡設置以降の燕との文化接触でもたらされたものであろう。

さらに突起もなく刃部の両側辺がほぼ並行し、脊の研ぎによる稜線が茎近くまであるものを4式とする。これは秋山進午氏が提示した遼寧IV式銅劍と同じ型式的特徴を示す(秋山一九六八)。桓仁県大甸子石棺墓では、4式銅劍としたものと、鉄器や明刀錢が共伴している(曾昭蔵ほか一九八一)。明刀錢の存在は燕の遼東郡設置以降の展開とすることができ、この石棺墓は前三世紀と考えるべきであらう。したがって4式は少なくとも戦国時代後半期のものと考えられる。型式学的には2 b 式の劍身下端の膨らみがより退化する変化方向と想定される。

こうした型式変化を武器の機能的変化という意味で眺めると、全体が細長くなる傾向にあるところに注目すべきである。表1でも明らかのように、1 a・1 b 式や2 a 式に比べ、2 b 式以降の型式は長さが長くなることに特徴がある。前者が全長三〇cm以下であったものが、後者になると三〇cm以上と長くなるとともに、長さの割

に幅が増えないという細長くなる傾向が読みとれる。さらに脊における研ぎの稜線が茎まで延びる傾向は、2 b 式以降の変化が剣としてより深く突き刺すという武器としての機能変化を示しているのである。2 b 式から 3 a 式、3 b 式という変化方向と、2 b 式から 4 式という変化方向の二つの組列が見いだされる。2 a 式の定点が前五〇〇年にあり、2 b 式が前五世紀から前四世紀、3 a 式が前四〜三世紀、3 b 式が前三世紀、4 式が同じよう
に前三世紀と考えることができるであろう。

近年、町田章氏も遼寧式銅剣の編年を提示されている(町田二〇〇六)。遼西と遼東に限るものであるが、それぞれの地域において詳細な編年を示されている。たとえば遼西では私の遼寧式銅剣Ⅰ式段階を三段階に分けられるものであり、相対的に大型化する変化方向が結果的に示されている。また、そこでの細分は銅柄との組み合わせから年代軸としては妥当なものとなっていると思われる。しかし、個々の遼寧式銅剣の細分は、分類の明確な基準が明示されておらず、その型式変化の方向性や変化の属性単位が示されていない。あるいは本稿のように地

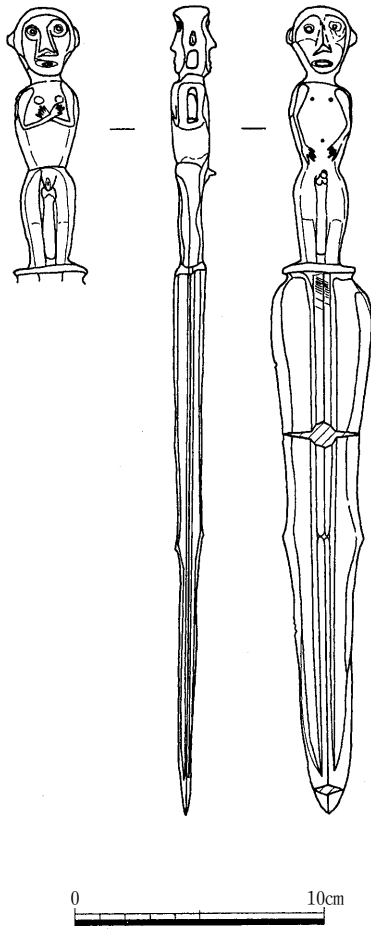


図 5 遼寧式銅剣 0 式
(南山根東区石棺墓出土)

域を横断して眺められる属性や様式変化を示すものではない。結果的には年代観としても本稿のものに近い。ただし、遼寧式銅剣 2 a 式とした町田氏の III a 式

銅劍である杏家莊二号墓のものを報告書の記載通りに戦国前期とするなど、既存の遼東の年代観に左右されたため、遼東の遼寧式銅劍後半期の年代が相対的にやや新しくなっている。本稿の年代観との差異はこのようなところに起因している。また、遼西の遼寧式銅劍に関して、私自身は、遼寧式銅劍0式ともいうべき脊の稜線があらかじめ鑄型において鑄造された寧城県南山根東区石棺墓出土男女女人身柄遼寧式銅劍(図5、靳楓毅一九八三)や喀左県和尚溝六号墓(遼寧省博物館・朝陽市博物館一九八六)のものを、遼寧式銅劍の系譜関係からすれば、初段階に置くべきものと考えている。そ

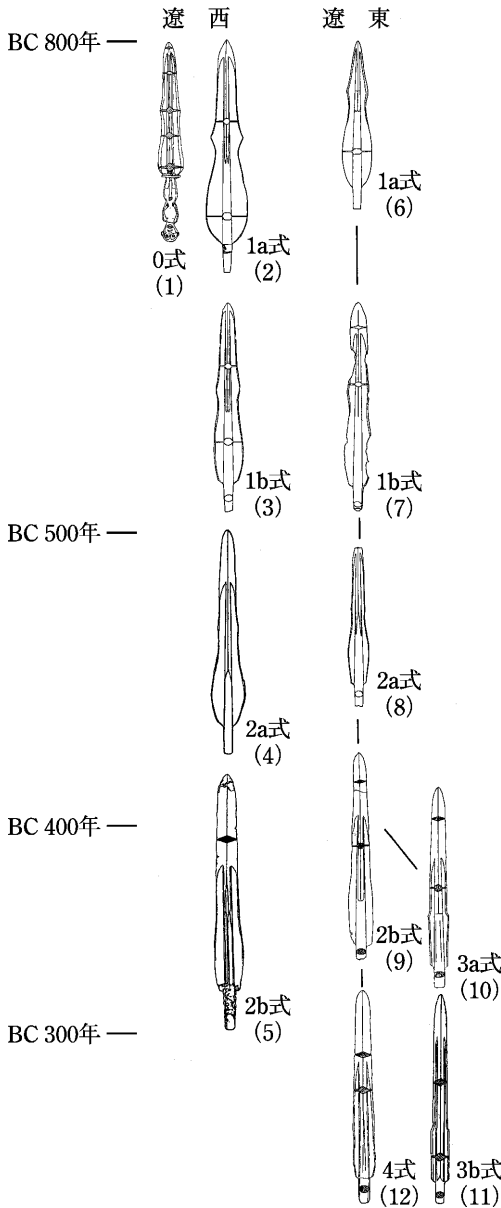


図6 遼西・遼東の遼寧式銅劍の変遷

(1 南山根、2 十二台營子、3 胡頭溝5号墓、4 三官甸、5 孤山子1号墓、6 趙王屯、7 下三台水庫、8 伝撫順、9 趙家堡、10 大房身、11 五道嶺溝門、12 尹家村)

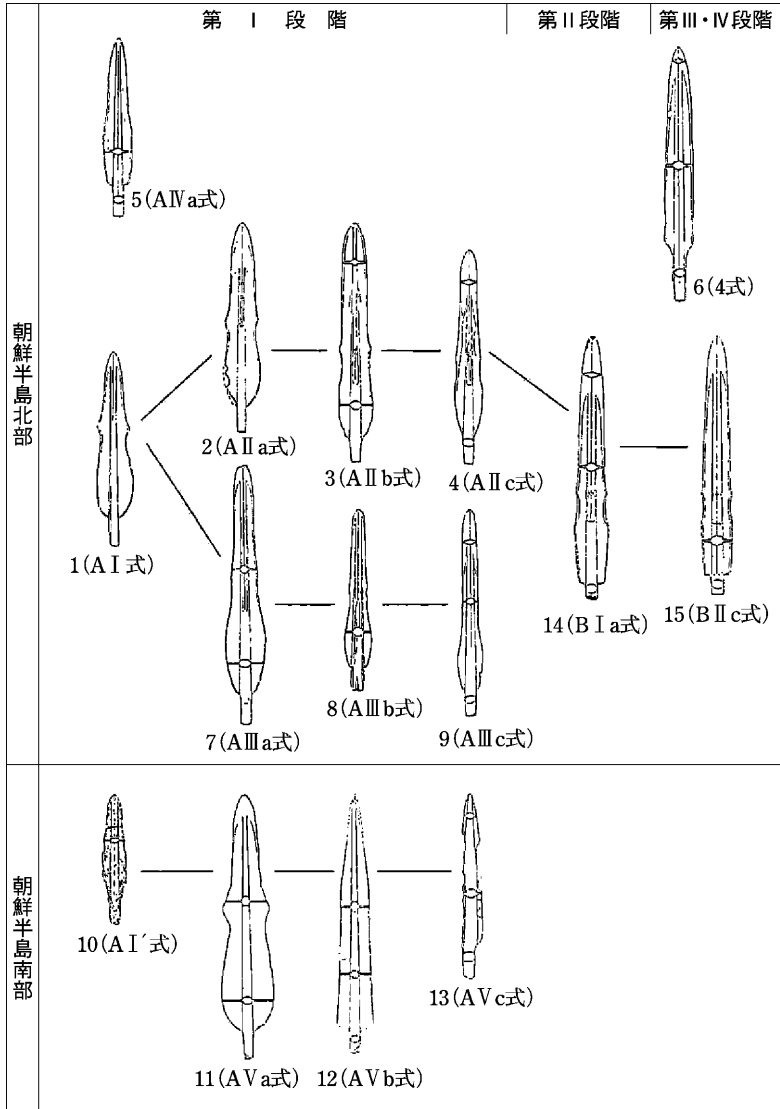
の点で町田氏がI b式とした和尚溝六号墓の位置づけとは異なるものとなる。朝陽市黃花溝出土の石製鑄型などは遼寧式銅劍0式の銅劍鑄型⁽¹⁾である。これらについては紙面の関係からも別稿で述べることにしたい。

以上で述べてきたことをまとめるために、遼西と遼東に限り遼寧式銅劍の変遷(図6)を提示しておきたい。

四 遼東の遼寧式銅劍をもとに朝鮮半島青銅器文化の年代を位置づける

このように見ていくと、遼西・遼東で見られた遼寧式銅劍の型式変遷と朝鮮半島における銅劍の型式との併行関係を考える必要がある。朝鮮半島といってもこの場合は、まず遼東に隣接する朝鮮半島北部の青銅器の型式変遷との対応である。各地域出土の銅劍の型式学的変遷は既に明らかにしているが(宮本二〇〇二c)、この場合、型式設定には型式認定の幾つかの属性要素がある。地域を横断して型式間にその型式認定の属性の共有関係が存在するとすれば、これは同時期ないし同じ段階と規定することができる。しかもこうした併行関係の段階性が、型式属性の共有関係で示され、かつその相互の変遷の順序に矛盾がないことが肝心である。これは、いわば土器型式の地域編年間の併行関係を決定すると同じ方法を用いるものである。

朝鮮半島北部に関してはA I式とした遼東の遼寧式銅劍A I a式と同じものから、A II式とA III式が分離するように変化し、それぞれA II a式↓A II b式↓A II c式、A III a式↓A III b式↓A III c式へと変化する(図7)。この内、A II a式とした西浦洞のものは直接観察することができなところから脊の形状は不明であるが、A III a式とした国立中央博蔵の銅劍では突起は退化しているものの、突起に対応する部分の隆起は僅かに残るもの(宮本・田尻二〇〇五)であり、これらの特徴からみれば遼東の遼寧式銅劍I b式と型式認定の属性を共有しているとすることができる。そこで、A II a式とA III a式の朝鮮半島青銅器文化I b段階を遼西・遼東の遼寧式銅劍I



遼東の遼寧式銅劍から弥生の年代を考える

図 7 朝鮮半島の銅劍の展開

(1 琴谷洞、2 西浦洞、3 伝平壤、4 伝成川、5 仙岩里、6 平壤付近、7 中央博物館、8 平壤付近、9 龍興里、10 比萊洞、11 松菊里、12 鎮東里、13 徳峙里、14 平壤付近、15 黄海道)

b式段階と併行するものと考ええる。当然これに型式的に遡るAⅠ式銅劍の段階である朝鮮半島青銅器文化Ⅰa段階は、遼西・遼東の遼寧式銅劍Ⅰa式段階に併行であり、突起や脊の隆起などの属性を共有する段階である。一方、突起が微かに残りながらも形骸化しており、脊の隆起が微かに残らないし消失した段階として、朝鮮半島北部の遼寧式銅劍AⅡb式・AⅡc式、AⅢb式・AⅢc式を挙げることができる。AⅡc式とした伝成川出土のものや、AⅢc式とした龍興里のものは脊の隆起が微かに残っている(宮本・田尻二〇〇五)。この段階は、遼西・遼東の2a式と同じように、突起部に対応する位置で研ぎ分けられないし、研ぎ分けが形骸化してその規範が残っている段階であり、決して研ぎは茎近くまで施されない段階である。ただし、遼東で認められたような関の角の形成はなく、湾曲を呈するままであるが、これは機能に基づく変化とは関係ないために、朝鮮半島北部では採用されなかったものである。

このように見てきた場合、遼東の2a式の実年代を前五〇〇年頃と考えることと矛盾は存在しないであろうか。既に龍興里出土のAⅢc式銅劍と共伴する銅刀の編年的な位置づけにより、鄭家窪子六五二二号墓の銅刀(瀋陽故宮博物館・瀋陽市文物管理弁公室一九七五)に龍興里の銅刀は次ぐ段階であることを示した(宮本二〇〇四c)。鄭家窪子六五二二号墓の銅劍に関してはこれまで遼寧式銅劍Ⅰb式であることを示したが、銅刀の形式的な変化と同じく、龍興里のAⅢc式銅劍を遼寧式銅劍2a式併行と考えることと、矛盾しない。先に鄭家窪子六五二二号墓を前6世紀と考えた(宮本二〇〇四b)ことも矛盾しないのである。

近年、平壤市順安区新成洞石槨墓から遼寧式銅劍が出土している(国立中央博物館二〇〇六)。これは、突起が微かに残るが、脊の隆起がないものの脊の研ぎ分けが明瞭な遼寧式銅劍AⅡc式である。伴出した黒陶長頸壺は、頸部が細く長めの長頸部とともに球形をなす胴部の形態的特徴は、明らかに大田市槐亭洞など細形銅劍初期のBⅠa式・BⅠb式(朝鮮半島青銅器文化Ⅱ段階)に伴出する黒陶長頸壺(宮本二〇〇三a)より古いものである。

その長頸壺の形態は、鄭家窪壺六五一二号墓の長頸壺と槐亭洞の黒陶長頸壺の中間的な形態を示している。さらに、新成洞石槨墓から出土した多鈕粗文鏡は、その厚い断面形から見た場合、鄭家窪子六五一二号墓の多鈕粗文鏡に次ぐ段階の型式であり、遼寧式銅劍2 b式と共伴する遼寧省本溪市梁家村二号墓出土多鈕粗文鏡より古い型式である。以上から、遼寧式銅劍A II c式は、遼寧式銅劍1 b式の鄭家窪子六五一二号墓より新しく、遼寧式銅劍2 b式の梁家村二号墓や細形銅劍B I a・B I b式の槐亭洞より古い段階のもので、併行することができると考えられる。この点からも、朝鮮半島の遼寧式銅劍A II c式が遼東の遼寧式銅劍2 a式に併行する段階のもので考えられる。

そして、朝鮮半島北部では遼寧式銅劍A II式の系譜の延長として、細形銅劍(B I a式) が出現していくことになる。その年代は前五〇〇年以降となり、前五世紀にその最古段階のものが現れることには問題がないであろう。岩永省三氏からは朝鮮半島北部の遼寧式銅劍A III式を遼東の遼寧式銅劍2式に先行させることはできないと指摘された(岩永二〇〇五)が、その点に関しては、遼西・遼東の遼寧式銅劍2式の細分により、その併行関係を明らかにすることにより、その指摘に対する反論としておきたい。すなわち朝鮮半島北部の遼寧式銅劍A II・A III式は、遼東の遼寧式銅劍1 b式から2 a式に併行するものであり、遼寧式銅劍2 b式に先行するものである。岩永氏の指摘の疑義に関しては感謝しなければならないが、併行関係を明確にすることにより、遼東の遼寧式銅劍2 a式以前に朝鮮半島北部の遼寧式銅劍が存在することが明らかとなった。重要な点は遼東の遼寧式銅劍2 a式が杏家荘二号墓の出土例から、明らかにその年代の下限を前五〇〇年とする事実が判明したことにあるのである。この事実の重みは大きく、東北アジアの実年代の定点とすることができる。

朝鮮半島南部では、A I式として比萊洞支石墓出土の銅劍を挙げ、遼東の遼寧式銅劍1 a式ないし朝鮮半島北部の遼寧式銅劍A I式の再加工品から、その後、A V式とする遼寧式銅劍が南部地域で生産されたことを示した。A V式は基本的に遼西・遼東の遼寧式銅劍1 a式の形態を忠実に模し、突起と突起に対応する脊の隆起も明瞭で

あり、さらには関の形態も湾曲を呈している。しかし、脊が断面方形であり、遼西・遼東のものに比べしつかりしているとともに、脊から剣身刃部にかけて研ぎをもたない点が、武器としての機能性をもたない銅剣であることを指摘した(宮本二〇〇二c)。また規格上、遼西・遼東に比べ大型であることを指摘し、実用武器ではない宝器や祭器としての型式変化を示すことを指摘した。そこで大きくA V a式↓A V b式↓A V c式という変化を想定したのである(図7)。A V a式は形態的には遼西・遼東の遼寧式銅剣1 a式を忠実に真似る段階。A V b式は、A V a式の形態がやや退化した段階。A V c式はさらに刃部が退化し、小型化した段階である。少なくとも支石墓での共伴する土器型式から見れば、A V b式は慶尚南道鎮東里石棺墓で、A V c式は全羅南道徳峙里シンギ一号支石墓の例のように松菊里式土器段階であることが明白である。

A V a式を例えば松菊里石棺墓の出土例において、共伴する勾玉が一穿孔であるところから、二穿孔の龍興里の勾玉の方が型式的に古いとし、龍興里のA III c式銅剣の方が松菊里石棺墓のA V a式銅剣より古いとす説(岩永二〇〇五)があるが、勾玉の穿孔の数が時期差を示すという根拠は全くない。この穿孔数を以て勾玉の時期差を論ずることはできず、勾玉から年代差を導き銅剣の年代差を示すことはできないのである。忠清南道牙山郡白岩里出土の天河製二孔式勾玉の年代から龍興里の勾玉の年代を武末純一氏が論じているが(武末二〇〇四)、白岩里出土の長頸壺はあくまでも粘土帯土器に共伴する黒陶長頸壺に近似するものであり、白岩里の年代も無文土器中期後半を遡り得ない。むしろ問題なのは武末氏がA V c式銅剣を本稿でいう遼東の2 b式や4式銅剣と類似するとして同時期のものと比定したことにある(武末二〇〇四)。剣幅が細く刃部が直線をなすことのみが、A V c式と2 b式・4式との類似であり、大きさや細部の形態、何よりも脊の研磨は全く異なっている。強引に両者を一括したものであり、両者の同時性の根拠は全く存在しない。A V c式はA V式内での内的変化によって生まれただのである。一方の2 b式や4式は、遼東において2 a式からの一連の変化型式であり、それらの時空的な位

置づけは全く交差しないのである。とりわけ時間軸上の隔たりは全く関係がないものである。

さて、A V a 式銅劍に戻るが、A V a 式銅劍の祖形は遼寧式銅劍 1 a 式であり、1 b 式でも 2 a・2 b 式でもない。遼寧式銅劍 1 a 式と同じものは朝鮮半島北部では A I 式銅劍であり、朝鮮半島南部では再加工された比萊洞支石墓出土の A' I 式も再加工された以前のもが模倣の対象になっているものである。A V a 式は朝鮮半島南部において A I 式銅劍ないし遼東の 1 a 式銅劍を模倣して製作されたものである可能性が高い。模倣の対象は、その型式属性から見れば、A I 式や遼西・遼東の 1 a 式銅劍であり、決して遼西・遼東の 1 b 式銅劍や 2 a・2 b 式銅劍ではない。そうであるならば、遼西・遼東の 1 a 式銅劍や朝鮮半島の A I 式銅劍である朝鮮半島青銅器文化 I a 段階に連続する段階、すなわち朝鮮半島青銅器文化 I b 段階に A V a 式は製作されたものであると考えらるべきであろう。模倣対象とする銅劍との関係からみれば、決して A II a 式・A III a 式以降の新しい段階のものではあり得ず、そのため併行関係上、朝鮮半島青銅器文化 I c 段階以降になることはあり得ないということになる。

さて、現在、比萊洞支石墓の年代的な位置づけが問題となる。伴出する土器型式からの位置づけは現状では決まがたく、それよりも磨製石鏃の型式から年代的な位置づけを求める研究者が多い。庄田慎矢氏は、自信の編年から比萊洞一号支石墓を孔列文土器の最終段階に位置付けている(庄田二〇〇五)。同じく磨製石鏃の位置づけから、中村大介氏は比萊洞一号支石墓を無文土器前期後葉に位置付けている(中村二〇〇五)。こうした研究者の説を妥当なものとするならば、A' I 式銅劍すなわち朝鮮半島青銅器文化 I a 段階は孔列文土器終末期ということになる。継ぐ A V a 式銅劍の段階はこれより新しい段階であり、すでに述べたような A V a 式の退化型式である A V b 式・A V c 式の共伴土器が松菊里式土器であるならば、A V a 式は先松菊里式段階に位置付けることが可能である。したがって朝鮮半島南部の地域的特徴と地域生産された A V 式の遼寧式銅劍は先松菊里式土器から松菊

里式土器段階であることができるのである。

なお、庄田慎矢氏は比來洞の遼寧式銅劍を分割されたものではなく、もともと現在の形態を意図して作られたものであるとする(庄田二〇〇五、庄田二〇〇六)。実際、茎の端部には湯口に相当する部分の痕跡が残っており、私が想定したように銅劍の基部側であることは疑いない。庄田氏は基部側であった場合、閃の形態が他のA V式銅劍と異なることを以て、A V式銅劍の分割品ではないと推定する。この点ではA V式銅劍の分割品と考える姜仁旭氏の考え(姜仁旭二〇〇五)とも異なっている。また、春成秀爾氏は、後に述べる黄海北道仙岩里一号石棺墓出土銅劍の基部側を再加工したものと想定している(春成一〇〇七)。比來洞の銅劍に見られる断面が比較的丸く薄い劍身後半部の脊は、遼東などの銅劍に認められる特徴である。したがって私は比來洞の銅劍は、遼東の遼寧式銅劍の分割品か、あるいは遼東と同じ規範で作られた朝鮮半島北部のA I式銅劍の分割品であると考えるのである。したがってその型式記号をA' I式としているのである。

また、遼寧式銅矛に関しては、A式とその変異形であるB式、さらに大型化したC式に細分し、A式が遼東内陸部から朝鮮半島北部に分布するもので、C式がV式遼寧式銅劍と同じ朝鮮半島南部に分布することを既に示している(宮本二〇〇二c)。A式はさらに細分が可能であり(図8)、刃部の突起の位置が刃部の中心に対して前方部に偏るA 1式(図8-1)、突起が刃部長のほぼ中央に位置しているA 2式(図8-2)、さらに突起が刃部の中心に対して後方部に位置しているA 3式(図8-5)に分類したことがある(宮本二〇〇二a)。この型式変化は、A 1式↓A 2式↓A 3式という変化方向を想定しているが、A 1式に関しては吉長地区に限られ、A 2式が大同江下流域を中心として朝鮮半島北部に出現する。吉長地区がより古い段階から存在するというように、吉長地区を中心として地理勾配的に南に向かうにしたがってより新しい型式の遼寧式銅矛が出現するという傾向を示している。したがって、A式遼寧式銅矛はその起源地が遼東内陸部の吉長地区にあり、その系譜で大同江下流域を中

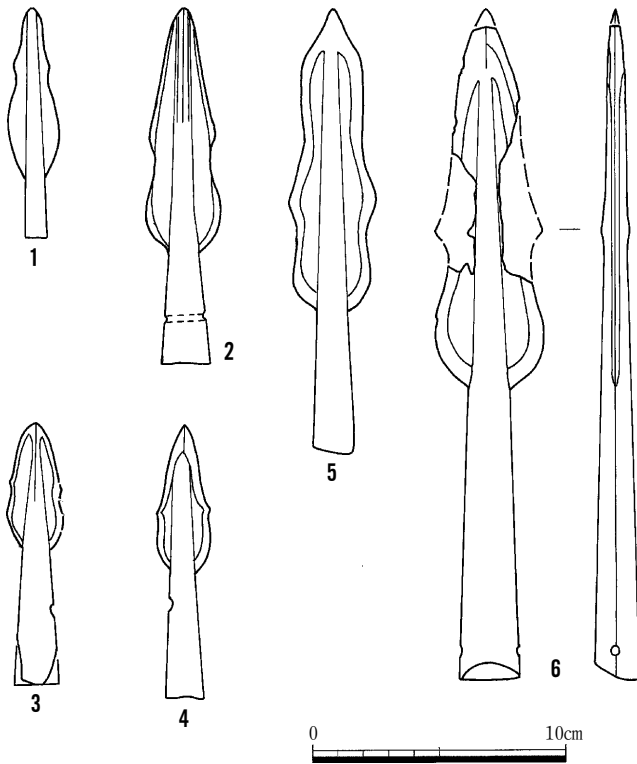


図8 遼寧式銅矛の展開

(1 星星哨 D 区13号墓、2 西豊誠信村、3 表岱10号住居、4 南陽里16号住居、5 吉林蛟河小郭山、6 伝保寧)

心としてA2式銅矛が成立したと考えるべきであろう。

大同江下流域のA2式遼寧式銅矛が出土した表岱一〇号住居(図8-3)や南陽里一六号住居(図8-4)あるいは龍谷里五号支石墓は、コマ形土器文化3期に位置づけられている。さらに遼寧式銅劍が出土する石棺墓はコマ形土器文化2期とする(徐国泰ほか二〇〇三)。コマ形土器文化2期は伴出する美松里型壺の形態からすれば、遼東の上馬石A地点下層に併行すると考えられる(宮本一九九一)。また、その後出するコマ形土器3期は上馬石A地点上層に大まかに併行するものである

う。このように、朝鮮半島北部では、遼寧式銅矛の出現は相対的に遼寧式銅劍の出現段階より一段階新しい段階であることができる。その意味で、遼東内陸部の遼寧省西豊県誠信村石棺墓の一括資料は注目すべきである（遼寧省西豊県文物管理所一九九五）。ここでは突起や脊の隆起が微かに残る遼寧式銅劍1b式とともに、A2式遼寧式銅矛（図8-2）が相伴している。遼寧式銅劍1b式とA2式遼寧式銅矛が同時期であるとすれば、型式学的に遡るA1式遼寧式銅矛が吉長地区では遼寧式銅劍1a式段階に成立していた可能性があるだろう。その意味で、吉林省吉林市星星哨石棺墓地において相伴関係ではないものの、同じ墓地群において遼寧式銅劍1a式と遼寧式銅矛A1式が出土していること（吉林市博物館ほか一九八三）は、上記の年代的な併行関係を示唆するものであろう。

一方、朝鮮半島南部のC式遼寧式銅矛は、全羅南道麗川市積良洞二号石槨のように、相伴関係ではないが同じ墓地群からは遼寧式銅劍が出土しており、同じ時期のものと考えられ、松菊里式土器時期に収まるものであろう。C式遼寧式銅矛は、突起部が刃部の後方に位置しており、A3式銅矛と類似しており、A2式矛の変化系列にあることは疑いない。先の大同江下流域の南陽里一六号墓のA2式矛（図8-4）が、伝保寧のC式遼寧式銅矛（図8-6）に系譜的に繋がることは形態の類似性からも推測できるであろう。また南陽里一六号住居（図8-4）や龍谷里五号支石墓のA2式銅矛は、表岱一〇号住居出土のA2式銅矛（図8-3）に比べ、刃部に対する突起の位置がよりA3式矛（図8-5）に近いものであり、形式的には前者の方が後者より後出するものである。また、青銅に含まれる錫の含有量の多寡から、表岱と南陽里の銅矛に関して同様な時期差が推定されている（徐国泰ほか二〇〇三）。以上のような相対関係からは、遼寧式銅矛A2式やC式は、私がいち朝鮮半島1b段階〜1c段階（宮本二〇〇三a）に併行するものと考えられるのである。

さて、このように遼西、遼東、朝鮮半島北部、朝鮮半島南部の銅劍の型式変遷とその併行関係が確立したわけ

であるが、これをもう一度、朝鮮半島青銅器文化（宮本二〇〇三）との対応からまとめらるならば、以下のようになる。朝鮮半島青銅器文化Ⅰa段階である遼寧式銅剣AⅠ式段階が遼西・遼東の遼寧式銅剣Ⅰa式、朝鮮半島青銅器文化Ⅰb段階の遼寧式銅剣AⅡa・AⅢa式と遼寧式銅剣AⅤa式段階が遼西・遼東の遼寧式銅剣Ⅰb式、朝鮮半島青銅器文化Ⅰc段階の遼寧式銅剣AⅡb・AⅡc式、遼寧式銅剣AⅢb・AⅢc式段階が遼西・遼東の遼寧式銅剣2a式に併行するということになる（表2）。

朝鮮半島青銅器文化Ⅰa段階の併行期において、遼西、遼東、朝鮮半島北部で年代上の傾斜がないことは、遼東の遼寧省清原県李家卜遺跡での青銅矛の共伴や、朝鮮半島南部の黄海南道白川郡大雅里石棺墓の共伴青銅鏃からも説明することができる（宮本二〇〇四c）。また大雅里石棺墓で伴出する磨製石鏃の内容は、中村大介によれば朝鮮半島南部の比來洞と同時期であるとされ（中村二〇〇五）、上記した併行関係において全く矛盾がみられないのである。

さらに細形銅剣BⅠ式（宮本二〇〇三a）が、遼東の遼寧式銅剣2b式や遼寧式銅剣3式・4式と併行することになる。細形銅剣でも燕の遼東郡設置以降に製作されたと考えられる細形銅剣BⅠc式からすれば、細形銅剣BⅠa式やBⅠb式段階である朝鮮半島青銅器文化Ⅱ段階が、遼東の遼寧式銅剣2b式・3a式に併行する。さらに細形銅剣BⅠc式の朝鮮半島青銅器文化Ⅲ段階が遼東の遼寧式銅剣3b式・4式段階に併行するとすることができるのである。表1の出土地名表で示されるように、遼寧式銅剣2b式が遼東全域に認められるのに対し、遼寧式銅剣3・4式は遼東の周辺部のみに認められ

表2 銅剣型式の併行関係と朝鮮半島青銅器文化

朝鮮半島青銅器文化	遼西	遼東	吉長地区	半島北部	半島南部
朝鮮半島青銅器文化Ⅰa段階	1a	1a	1a、矛A1	AⅠ	AⅠ'
朝鮮半島青銅器文化Ⅰb段階	1b	1b	1b、矛A2	AⅡa、AⅢa、矛A2	AⅤa、矛B
朝鮮半島青銅器文化Ⅰc段階	2a	2a	触角Ⅰ、矛A3	AⅡb・Ⅱc、AⅢb・Ⅲc	AⅤb・Ⅴc、矛C
朝鮮半島青銅器文化Ⅱ段階	2b	2b、3a	2b、触角Ⅱa	BⅠa・Ⅰb	BⅠa・Ⅰb
朝鮮半島青銅器文化Ⅲ段階		3b、4	3b、触角Ⅱb	BⅠc	BⅠc

ることも、前300年頃に設置された燕の遼東郡の出現と一致している。すなわち遼東郡設置前後に遼寧式銅劍3・4式が出現したことを物語っているのである。

こうした年代を実年代の定点で示せば、遼西・遼東の1a式遼寧式銅劍段階の年代の一点を前八〇〇年頃と見ることが出来る。この前八〇〇年という実年代は、遼西の遼寧式銅劍1a式開始の年代的定的とすることもできる。したがって朝鮮半島青銅器Ia段階の上限年代をおおよそ前八〇〇年頃と見積もることが出来るであろう。さらに杏家荘二号墓から遼寧式銅劍2a式の下限年代を前五〇〇年と押さえるところから、朝鮮半島青銅器文化Ic段階から細形銅劍が成立するII段階の境を前五〇〇年と位置付けることができる。さらに細形銅劍B Ic式や銅戈、多鈕細文鏡が成立する朝鮮半島青銅器文化III段階とその前段階のII段階との境は、自説の通り前三〇〇年とすることができる。

なお、かつて朝鮮半島における遼寧式銅劍A IV式とした(宮本二〇〇二c)ものうち、A IV a式として黄海北道仙岩里一号石棺墓出土のものは、特異な型式である。突起をもたず、脊の研ぎの稜線は基部にまで達するものである。脊の隆起は不明であるが、全体的属性は新しい傾向を示すものの、共存する石鏃などの副葬品からはコマ形土器2期段階とされるものである(徐国泰ほか二〇〇三)。遼東の遼寧式銅劍1a式と同型式と考える(宮本二〇〇四c) 黄海南道大雅里石棺墓の銅劍も、共存遺物からは同時期とみなされるものである。今のところA IV a式とした仙岩里一号石棺墓のものは例外的な存在であり、類例が存在しないところからも、その型式の位置は保留せざるを得ない。ただし、大雅里石棺墓の銅劍は脊の稜線が基部まで通るタイプであり、遼寧式銅劍0式(図5)とした鑄型段階で稜線が鑄造されたものの可能性がある。朝鮮半島青銅器Ia段階に併行するものの可能性がある。姜仁旭氏は大雅里のものなどを含めて仙岩里式を設定する(姜仁旭二〇〇五)が、前者はここというA I式に相当し、これらを同一型式にまとめることには躊躇を覚える。

むしろ私が嘗てA IV a式からA IV b式へと変化するとした(宮本二〇〇二c)型式変化に問題があった。朝鮮半島北部でA IV b式遼寧式銅劍としたものは、遼東の遼寧式銅劍4式と同一型式のものである。この場合、出土地は朝鮮半島北部であっても、製作地は遼東である可能性もある。ともかく遼寧式銅劍4式と同一型式のA IV b式は、年代的にもA IV a式との直接的な関係は存在しない。A IV a式とA IV b式には、系譜関係は存在しないと考えるべきであろう。この点、誤解を与えていた点をお詫びしなければならない。また、A IV b式の一つとした黄海南道載寧郡孤山里では、中国式銅劍が共伴している。遼東の遼寧式銅劍4式もほぼ戦国時代後半期のものであるところから、年代的にも両者には何ら矛盾が存在しない。A IV b式という型式設定が誤解を与えたとすればこれを撤回し、遼寧式銅劍4式がこの段階に遼東から朝鮮半島北部に分布すると捉えておいた方がよいであろう。平安南道平原郡新松里遺跡出土の遼寧式銅劍4式と中国式銅劍の共伴例(全宗一 一九九七)も同様の例である。

五 自説批判への展望

岩永省三氏がこれまで年代を決定する際に展開された議論(岩永二〇〇五)で、私の考え方に対する批判は大きく二つあるといえよう。一つは磨製石劍の変遷とその祖形論に対する考え方の違いである。これは柳田康雄氏が半島の磨製石劍の祖形を東周代の中国式銅劍に求める考え方(柳田二〇〇四)に基づいている。同じように中国式銅劍に磨製石劍の年代の定点を置くことにより、私の年代論を批判したものに寺沢薫氏のもの(寺沢二〇〇四)がある。さらに朝鮮半島南部の遼寧式銅劍A V式の年代の定点をどこに求めるかという点とともに、遼寧式銅劍A III c式の龍興里の年代の位置づけの違いである。さらにこれに付随する形で細形銅劍の開始期の位置付けに差違が認められるのである。

これら岩永氏からの批判のうち、銅劍の年代の定点に関しては、既に本稿で述べてきた議論によって批判への反論はつきている。ここでは繰り返さないが、なお強調しておくべきは、山東半島の杏家莊二号墓での遼寧式銅劍2a式の副葬例から、その銅劍の年代の定点が前五〇〇年頃であることである。これは朝鮮半島の細形銅劍の成立年代を考える上でも重要であり、東北アジアの実年代を語る上で重要な事実である。また、遼東の遼寧式銅劍2b式以降の型式変化や細形銅劍の型式変化は、前五世紀における燕の遼西への領域拡大や間接支配(宮本二〇〇〇・二〇〇七)と軌を一にする動きであり、燕と接触する地域での軍事的な緊張によるものである。燕の東漸に伴い、遼西では遼寧式銅劍2a式や2b式段階には遼西式銅戈が出現すると共に、燕の青銅彝器や燕系陶器が出土するように(小林ほか二〇〇七)、燕の影響が高まっている。

また、もう一つの批判は、朝鮮半島の磨製石劍に関する年代的な批判である。磨製石劍に関する考え方は別稿(二〇〇四c)で既に示しているが、基本的にその考え方に何ら矛盾は存在しない。磨製石劍の祖形を何に求めるかの違いであるが、それを考えるにあたっては祖形となる青銅器とその併行年代を考慮することが重要である。その意味で、中国式銅劍が磨製石劍の祖形になることはあり得ない。既に述べてきたように、中国式銅劍との共伴例は、遼東の遼寧式銅劍2b式や3式・4式段階にあり、それ以前にはない。遼西においても燕の間接支配時期以降である。最も重要なことは、東北アジアの青銅器文化が長城地帯の北方青銅器文化の系譜を引くものであり、殷周社会とは異なった世界観であるということである(宮本二〇〇〇)。両者は文化領域の接触する地域での交流がなく、それから離れた遠隔地において交渉は全く存在しない。さらに殷周世界が、北方青銅器文化圏内にある東北アジアの青銅器文化へ、その文化的さらにその領域的な広がりが確認できるのは、前五世紀以降の展開である(宮本二〇〇〇)。その時期は既に示したように細形銅劍文化の世界であり、そこには基本的に磨製石劍は共伴しない。磨製石劍は朝鮮半島の遼寧式銅劍やそれ以前の段階に用いられたものであることは、

共伴関係など考古学的な事実によって明白である。まずは先験的な予見からではなく、客観的な事実の積み重ねを重視すべきであろう。

岩永氏は私の説の根拠に対し未検証仮説であると述べられた(岩永二〇〇五)。同じことが見解を異にする岩永氏の批判の根拠にもあてはまるのである。今、方法的に重要なことは、各地域で見られる銅劍の型式変遷を横断する枠組み作りである。われわれ考古学者が慣れ親しんでいる個々の地域における土器型式を地域を横断して土器型式の編年網を構築すると同じことを、青銅器においても構築する必要がある。私はそういう立場に立つて、遼西・遼東から朝鮮半島北部、朝鮮半島南部の青銅短劍を中心とする青銅器変遷の枠組みを、突起、脊の隆起、脊の研ぎ形態という三つの属性から様式的共時性によって、述べてきたところである。ここでは多少各段階の実年代比定における実際的年代との開きは存在する可能性があるが、大きな枠組みを超えた矛盾は存在しないと考えている。あるいは土器編年網と同じように編年上の各型式の年代的な上限や下限には幾分かの誤差は存在しよう。しかし、土器型式の編年と同じように、青銅器においても編年網や編年枠が大切である。考古学の伝統的な手法は所詮相対年代でしかないものであり、相対年代の正確さが求められているのである。さらに重要なことは、ある型式変化やある器種が成立する因果関係の説明が必要である。相対年代においてこの探求がなければ、何も意味しないし、考古学的な解釈は存在しない。実年代を研究者個人の思い入れやある根拠のない定説にしがいみつきあまり、実年代以上に大切な考古学的な変化や変遷の背景を説明することを忘れてしまうように見えてならない。その意味で現在必要なのは、東北アジアを横断する青銅器変遷の編年網の構築であり、枠組み作りである。その点で、私が考古学的手法を踏まえて構築した枠組みは、現在のところ矛盾のない最も妥当なものと考えている。そしてそれは東北アジアの歴史的な解釈を可能にするものである。青銅器以外の遺物、あるいは墓葬などの遺構を加えて総合的な変遷を示し、それを歴史的な解釈に高める必要性がある。私自身は具体的にその解釈をもつ

てはいるが、本稿では紙面の都合上これ以上述べないことにする。これまで述べてきたような、青銅器の年代的
 枠組みを示すにとどめ、責めを塞ぎたい。

なお、近年同じような展望のもとに遼西から朝鮮半島までの遼寧式銅剣の編年と併行関係を扱った宮里修の論
 考が出されている(宮里三二〇七)。個々の地域における銅剣の編年上の系譜関係は細部においては違いがあるも
 のの、大きな流れは結果的に本稿と類似するものとな
 っている。むしろ問題は、遼西と遼東の併行関係あ
 るいは遼東と朝鮮半島の併行関係の明確な論拠が示さ
 れていないことにある。特に宮里氏が弧山里タイプと
 したものは本稿で言う遼寧式銅剣4式で遼東を中心と
 して成立したものである。宮里氏もこの型式を遼東か
 ら流入した型式とする点では本稿と一致するが、それ
 が朝鮮半島の龍興里タイプや細型銅剣の成立期と一致
 させる根拠はないし、根拠そのものが示されていない。
 遼寧式銅剣4式の年代は前三世紀に下るものであり、
 新しいものとせざるを得ない。

六 おわりに

このように構築された東北アジアにおける青銅器の

遼東の遼寧式銅剣から弥生の年代を考える

表3 半島南部と北部九州の併行関係と弥生の年代
 (武末2004を改変)

		紀元前 800 年頃		紀元前 5 世紀			紀元前 300 年頃		
日 本	縄文土器		弥生土器						
	晩期		早期		前期			中期	
	広 田 式	黒 川 式	夜 白 Ⅰ 式	夜 白 Ⅱ 式	板 付 Ⅰ 式	板付Ⅱ式			城ノ 越式
						a	b	c	
						須玖Ⅰ式			
朝 鮮 半 島	(突帯文) 漢沙里式	欣岩里式	先松菊里式			水石里式		勒島式	
		可染里式	松菊里式						
	早期	前期	中期			後期			
無文土器									

編年網を基に、最後に北部九州との編年的な対応を示したい。武末純一氏による北部九州と半島南部の土器の併行関係（武末二〇〇四）は、ほぼ妥当であると考ええる。これに基づいて年代観を示すならば、以下のようなであろう（表3）。弥生早期である山ノ寺式から弥生前期の板付Ⅰ式ないし板付Ⅱa式の一部に併行する先松菊里式（松菊里式は、朝鮮半島青銅器文化Ⅰb段階（Ⅰc段階に相当し、前八世紀）前六世紀に相当するであろう。さらに板付Ⅱa式の一部から板付Ⅱc式の一部は、朝鮮半島青銅器文化Ⅱ段階に併行し、前五世紀（前四世紀に相当する。板付Ⅱc式の一部から須玖Ⅱ式にかけてが朝鮮半島青銅器文化Ⅲ・Ⅳ段階に併行し、前三世紀（前一世紀にかけて）と考えることができるであろう。さらに、黒川式に関しては前九世紀以前とすることができ、その上限に関しては、青銅器の併行関係からはもはや議論できない段階である。そのあたりに関しては既に別稿（宮本二〇〇四a・二〇〇五）で述べてきた。その点に関しては別稿を参考にしていただきたい。

本稿は二〇〇五年の年末には書き上げていたものであるが、その後諸般の事情から発表されないうままであった。脱稿後、遼寧式銅劍に関してはいくつかの論文が発表されたので、それに対する意見を含めて再度書き直した次第である。また、杏家荘二号墓の青銅短劍に関しては山東大学の變豊実先生のご配慮で二〇〇四年八月に実見させていただく機会があった。図示した図1（図3はすべて筆者の実測によるものであるが、図5に関しては九州大学大学院人文科学府博士課程の谷直子さんの実測・トレースによるものである。ここに記してこれらの方々に感謝したい。

注

(1) この他、内蒙古昭烏達盟敖漢旗山灣子の石製鑄型も脊に稜線があらかじめ彫り込まれているとする所見があるが（庄田二〇〇

六)、これは鑄型上の傷であり、もともと稜線を意図して彫り込まれたものではない。

(2) 伝成川出土の多鈕粗文鏡と鄭家窪子六五二二号墓の多鈕粗文鏡との型式的なヒアタスが大きいことを指摘したが(宮本二〇〇二c)、問題は伝成川出土の多鈕粗文鏡と伝成川出土のIIc式銅剣は共伴関係にあるという記録はなく、別々の出土物である可能性が高い。この点で誤解を与え、岩永省三氏からは自説を撤回したかのように受けとめられた(岩永二〇〇五)が、上記の考え方には変更がない。むしろ共伴関係がないところから、伝成川出土のIIc式銅剣は、伝成川出土多鈕粗文鏡からは年代を推し量ることができない。鄭家窪子六五二二号墓の多鈕粗文鏡は、1b式遼寧式銅剣と共伴し、前六世紀と考えられる。それと型式的ヒアタスをもつ遼寧省本溪市梁家村2号墓や寛甸県趙家堡子の多鈕粗文鏡は、2b式遼寧式銅剣を共伴しており、前五世紀後半〜前四世紀のものと考えられる。多鈕粗文鏡の型式変遷と実年代は矛盾していない。

文献

秋山進午一九六八・一九六九「中国東北地方の初期金属器文化の様相(上)(中)(下)」『考古学雑誌』第五三巻第四号、第五四巻第

一号・第四号

岩永省三二〇〇五「弥生時代開始年代再考―青銅器年代論から見る―」『九州大学総合研究博物館研究報告』第三号

煙台市文物管理委員会・棲霞県文物事業管理処一九九二「山東棲霞県占嶺郷杏家莊戦国墓清理簡報」『考古』一九九二年第一期

王青二〇〇七「山東発現の幾把東北系青銅短剣及び相關問題」『考古』二〇〇七年第八期

王富強二〇〇二「海陽嘴子前墓群の年代、得点及相關問題」『海陽嘴子前』齊魯書社

大貫静夫二〇〇五「最近の弥生時代年代論に就いて」『ANTHROPOLOGICAL SCIENCE (JAPANESE SERIES)』Vol.113, No.2

夏商周断代工程專家組二〇〇〇「夏商周断代工程一九九六―二〇〇〇年階段成果報告簡本」世界図書出版公司

河北省文物研究所一九九六『燕下都』文物出版社

吉林市博物館・永吉県文化館一九八三「吉林永吉星星哨石棺墓第三次発掘」『考古学集刊』第三集

吉林省文物工作队・吉林市博物館一九八二「吉林樺甸西荒山屯青銅短剣墓」『東北考古与歴史』第一輯

姜仁旭二〇〇五「韓半島出土琵琶形銅劍の登場地地域性について」『韓国上古史学報』第四九号

許玉林・王連春一九八四「丹東地区出土的青銅短剣」『考古』一九八四年第八期

遼東の遼寧式銅剣から弥生の年代を考える

- 許明綱一九九三「大連市近年来発現青銅短劍及相關的新資料」『遼海文物學刊』一九九三年第一期
- 許明綱・許玉林一九八三「遼寧新金鼎双房石蓋石棺墓」『考古』一九八三年第四期
- 魏海波一九八七「遼寧本溪發現青銅短劍墓」『考古』一九八七年第二期
- 魏海波・梁志龍一九九八「遼寧本溪阜上堡青銅短劍墓」『文物』一九九八年第六期
- 靳楓毅一九八三「論中国東北地区含曲刃青銅短劍的文化遺存(下)」『考古學報』一九八三年第一期
- 国立中央博物館二〇〇六『北녘의文化遺産』
- 国家文物局二〇〇〇「遼寧建昌東大子戰国墓地的勘探与試掘」二〇〇〇中国重要考古發現『文物出版社
- 小林青樹・石川岳彦・宮本一夫・春成秀爾二〇〇七「遼西式銅戈と朝鮮式銅戈の起源」『中国考古學』第七号
- 山西省考古研究所・北京大学考古學系一九九四「天馬—曲村遺址北趙晋侯墓地第四次發掘」『文物』一九九四年第八期
- 集安県文物保管所一九八一「集安發現青銅短劍墓」『考古』一九八一年第五期
- 庄田慎矢二〇〇五「湖西地域出土琵琶形銅劍と弥生時代開始年代」『湖西考古學』第二二輯
- 庄田慎矢二〇〇六「補遺：比來洞1号支石墓出土銅劍の觀察所見と派生する問題」『史葉』創刊号
- 徐国泰・池斗산二〇〇三「南陽里遺跡發掘報告」白山資料院
- 瀋陽故宮博物館・瀋陽市文物管理弁公室一九七五「瀋陽鄭家窪子の兩座青銅時代墓葬」『考古學報』一九七五年第一期
- 清原県文化局・撫順市博物館一九八二「遼寧清原県近年發現一批石棺墓」『考古』一九八二年第二期
- 曾昭藏・齊俊一九八一「桓仁大甸子發現青銅短劍墓」『遼寧文物』一九八一年第一期
- 손은탁一九九七「새로알려진古代時期遺物」『朝鮮考古研究』一九九七年第三号
- 武末純二二〇〇四「弥生時代前中期の歷年代—九州北部と朝鮮半島南部の併行關係から考える—」『福岡大学考古學論集—小田富士雄先生退職記念—』
- 中国社会科学院考古研究所一九九六『双砣子与崗上—遼東史前文化的發現和研究』科学出版社
- 寺沢薫二〇〇四「考古資料から見た弥生時代の歷年代」『考古資料大觀』第一〇卷、小学館
- 東亜考古學會一九三一『牧羊城—南滿州老鉄山麓漢及漢以前遺跡—』(『東亜考古學叢刊』第二册)
- 東北アジア考古學研究会訳一九八六『崗上—樓上—一九六三・一九六五中国東北地方發掘報告—』六興出版

- 中村大介二〇〇五「無文土器時代前期における石鏃の変遷」『待兼山考古学論叢―都出比呂志先生退任記念―』
- 春成秀爾二〇〇七「弥生青銅器の成立年代」『国立歴史民族博物館研究報告』第一三七集
- 林巳奈夫一九八四『殷周時代青銅器の研究―殷周青銅器綜覧―』吉川弘文館
- 馬良民・林仙庭二〇〇二「嘴子前墓群出土銅器銘文考釈及其他」『海陽嘴子前』齊魯書社
- 平勢隆郎一九九六『中国古代紀年の研究』汲古書院
- 撫順市博物館考古隊一九八三「撫順地区早晚兩類青銅文化遺存」『文物』一九八三年第九期
- 町田章二〇〇六『中国古代の銅劍』（研究論集XV 奈良国立文化財研究所学報第75冊）
- 宮里修二〇〇七「朝鮮式細形銅劍の成立過程再考―東北アジア琵琶形銅劍の展開のなかで―」『中国シルクロードの変遷』（アジア地域文化学叢書VII）雄山閣
- 宮本一夫一九九〇「戦国鏡の編年（上）（下）」『古代文化』第四二巻第四・六号
- 宮本一夫一九九一「遼東半島周代併行土器の変遷―上馬石貝塚A・BⅡ区を中心に―」『考古学雑誌』第七六巻第四号
- 宮本一夫一九九八「古式遼寧式銅劍の地域性とその社会」『史淵』第一三五輯
- 宮本一夫二〇〇〇『中国古代北疆史の考古学的研究』中国書店
- 宮本一夫二〇〇二a「古長地区における青銅武器の変遷と地域的特徴」『東北アジアにおける先史文化の比較考古学的研究』九州大学大学院人文科学研究院
- 宮本一夫二〇〇二b「東北アジアにおける触角式銅劍の変遷」『清溪史学』一六・一七合輯、韓国精神文化研究院
- 宮本一夫二〇〇二c「朝鮮半島における遼寧式銅劍の展開」『朝鮮半島考古学論叢』すずさわ書店
- 宮本一夫二〇〇三a「東北アジア青銅器文化からみた韓国青銅器文化」『青丘学術論集』第二二集、韓国文化研究振興財団
- 宮本一夫二〇〇三b「弥生の実年代を考古学的に考える」『東アジアの古代文化』一一七号
- 宮本一夫二〇〇四a「北部九州と朝鮮半島南海岸地域の先史時代交流再考」『福岡大学考古学論集―小田富士雄先生退職記念―』
- 宮本一夫二〇〇四b「青銅器と弥生時代の実年代」『弥生時代の実年代』学生社
- 宮本一夫二〇〇四c「中国大陸からの視点」『季刊考古学』第八八号
- 宮本一夫二〇〇五「園耕と縄文農耕」『第6回韓・日新石器時代共同学術大会発表資料集 韓・日新石器時代の農耕問題』（財）慶南

文化財研究院・韓国新石器学会・九州縄文研究会

宮本一夫二〇〇六「杏家荘2号墓出土の遼寧式銅劍」『東方はるかなユートピア―煙台地区出土文物精華―』山口県立秋美術館・浦上記念館

宮本一夫二〇〇七「漢と匈奴の国家形成と周辺地域―農耕社会と遊牧社会の成立―」『東アジアと日本―交流と変容―』統括ワークシヨップ報告書（九州大学21世紀OCBプログラム）

宮本一夫・田尻義了二〇〇五「朝鮮半島出土銅劍の集成」『弥生時代成立期における渡来人問題の考古学的研究』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室

森修一九三七「南満州発見の漢代青銅器遺物」『考古学』第八卷第七号

林滢一九九七「中国東北系銅劍再論」『考古学文化論集（四）』文物出版社

林仙庭・王志文二〇〇二「嘴子前墓群与田氏代姜之变」『海陽嘴子前』齐鲁書社

柳田康雄二〇〇四「日本・朝鮮半島の中国式銅劍と実年代」『九州歴史資料館研究論集』二九

李矛利一九九三「昌図県発現青銅短劍墓」『遼海文物学刊』一九九三年第一期

梁志龍・魏海波二〇〇五「遼寧本溪県朴堡発現青銅短劍墓」『考古』二〇〇五年第一〇期

遼寧省西豊県文物管理所一九九五「遼寧西豊県新発現的幾座石棺墓」『考古』一九九五年第二期

遼寧省博物館一九八五「遼寧凌源県三官甸青銅短劍墓」『考古』一九八五年第二期

遼寧省博物館・朝陽市博物館一九八六「建平水泉遺址発掘簡報」『遼寧文物学刊』一九八六年第二期

遼寧省文物考古研究所・葫芦島市博物館・建昌県文管所二〇〇六「遼寧建昌于道溝戦国墓地調査発掘簡報」『遼寧省博物館館刊』遼海出版社

遼陽市文物管理所一九七七「遼陽二道河子石棺墓」『考古』一九七七年第五期

旅順博物館一九六〇「旅順口区後牧城駅戦国墓清理」『考古』一九六〇年第八期